

講 義 等 の 内 容 (博 士 前 期 課 程)

授 業 科 目 名 (担 当 者 名)	講 義 等 の 内 容
演習 I 特別演習 I (麻 生 隆 史)	近年、情報技術が様々な分野で普及している中、その基礎理論をアナログとデジタルを比較することにより学ぶ。その際、デジタル信号処理の基本的な概念を中心に、具体例を挙げて説明し、さらに情報機器を使用して実践的にシミュレーションを行う。また、研究を進めるにあたっての必要な文献調査の方法や論文の読み方を指導する。
演習 I 特別演習 I (丑 山 優)	現代の企業経営は、企業を取り巻く環境変化に常に対応することを求められてきている。他方企業に求められている社会的位置づけも十分に経営者が認識して経営を行っていかねばならない。こうした事柄を、必要な文献・資料等を通して、より深くボウリングすることのために少人数の演習がある。修士論文のための課題設定、分析方法を指導する。
演習 I 特別演習 I (小 川 雄 平)	経済のグローバル化が進展した結果、企業経営は、変化の激しい経済環境に対応した国際経営戦略の下に遂行せざるを得なくなっている。演習 I では、多くの日本企業が事業展開している東アジア地域を中心に、企業を取り巻く国際経済環境を考察し、それに対応する企業の国際経営戦略を理論的・実証的に検証する。 特別演習 I では、各自の個別研究課題の設定・明確化を図り、修士論文のスケルトンの作成を目指す。
演習 I 特別演習 I (倉 地 和 敏)	租税は国民生活の基盤を支える重要なものであり、日本国憲法をはじめ各租税法等においてその義務と手続きについて定められている。 日本国における税制について、現行法の状況、立法趣旨、判例・学説の動向を研究する。 具体的には、演習 I では、主要な租税判例について判例の原文（地裁から最高裁まで）を基に討議を行う。そのためには、伊藤義一『税法の読み方判例の見方〔改訂第3版〕』（TKC出版）などで判例の読み方を理解した上で、事前に原告・被告の主張（争点）、裁判所の判断を整理し、理解しておくことが必要である。毎週異なった判例を取り上げ、年間で30事例の判例を研究する。 特別演習 I では、修士論文の研究対象として選んだテーマの文献収集・読解、論点の取りまとめを、指導教員との議論を通じて行っていく。
演習 I 特別演習 I (車 柄 圀)	演習 I では、最近インターネット技術の進歩やパソコンおよびデジタルカメラの普及により多くの分野において情報発信手段として用いられているカラー画像の処理技術、つまりデジタル画像処理の基盤技術およびその最新研究動向を把握するのを目的とする。また、MATLABによる画像情報処理の基礎的な関数について演習を行う。
演習 I 特別演習 I (津 守 常 弘)	「会計基準の国際的統一化」と「財務会計概念フレームワーク」の設定とによって生み出される現代の新しい会計制度のきわめて重要な特徴は、会計政策決定の制度的枠組みを強化することによって政策決定における恣意性を排除することであり、いかにすれば会計的意思決定のソフト面の制度化、会計システムのソフト面のハード化にはかならない。「演習 I」では、最新の会計基準のもとでマイクロ会計政策の決定者（経営者）の視点から、政策決定上どのような制度的制約と主体的可能性が与えられているかを、具体的事例を用いて研究する。

授業科目名 (担当者名)	講義等の内容
演習 I 特別演習 I (橋爪善光)	ヒトは無意識のうちに様々な運動学習をおこなっており、その内容を意識し、言語化して他者に伝えることは難しい。演習 I では様々な運動のコツを明らかにするために実際に各自のテーマに沿った運動計測実験を行い、そのデータ解析を行う。
演習 I 特別演習 I (丹羽崇之)	演習 I では、重要判例の検討を行う。各判決（決定）について、第一審からの全文を読み込んだ上で、事実、争点に対する当事者の主張、それに対する裁判所の判断、判決（決定）の意義及び課題について討論、研究することにより、法的思考力、紛争処理能力を涵養する。 特別演習 I では、各人の研究課題に取り組む。
演習 I 特別演習 I (荒爪高章)	工学的手法や情報学的手法は、様々な分野で使用され、新たな技術が次々と創出している。そこで、これらの手法を用いて生体医工学・生体情報学に関連する諸問題にアプローチする研究を実施する。具体的には、組織工学に基づく材料設計、in vitro 実験、生体工学に基づく数値解析などである。
演習 I 特別演習 I (春日克則)	いわゆる会計ビッグバン以降、わが国の会計基準ないし制度の多様化・複雑化が進展しており、これを受け会計学もまた、大学の4年間では修得できない程その研究領域が拡大している。そこで、演習 I ではこの拡大した領域について大学院生として求められる知識（とりわけ財務会計分野）の習得と、修士論文のテーマ設定に有用な研究を行うことを目的としている。 特別演習 I は、修士論文の作成に必要な、問題意識の明確化、先行研究のレビュー、そして当該先行研究に対する自らの研究の位置付けを行っていく。
演習 I 特別演習 I (遠藤真紀)	コロナ禍への対応など企業の経営環境は激変しており、市場環境の認識と経営戦略の重要性が増している。演習 I では、様々な企業の具体的な事例（社会人においては自社の経営戦略等）について考察し、基本的な戦略理論について概観・理解するとともに、修士論文のテーマ設定に必要な研究を行う。特別演習 I では、自身の研究テーマに必要な文献・資料の収集・考察等を通して、問題意識（仮説・視座等）の設定・明確化と修士論文の骨子について検討する。 机上での学習・研究だけでなく、必要に応じてフィールドワークを行う事がある。
演習 I 特別演習 I (宮崎裕士)	演習 I では、年間で 30 の主要な租税法判例研究を通じた租税法における基礎概念の定着、および法条文の読み方、判例研究のやり方と研究課題の選定を目標とする。 具体的には、テキスト等による租税法理論の事前学習と理論の実証場面としての判例研究を対応させながら、課題研究を報告してもらい、それに対するコメントを付すという形式で行っていく。 特別演習 I では、実際に自分の研究課題について取り組んでもらい、自身の研究課題と研究計画のアップデートを計画的に行っていく。その際、資料収集の方法等の指導も行う。社会人、特に会計事務所勤務の方が大半を占める環境の中で、一般的な閑散期である 6 月から 11 月までの期間で集中的に資料収集や研究の基礎を形作ることで、各自の効率的な研究の発展に寄与することを狙う。 研究とは、基本的には一人で行うものであるが、対話により発展するものでもある。院生同士、あるいは教員と自由闊達に議論を行うことで、院生自身の知識の定着と、知識の論理への発展を期待する。

授業科目名 (担当者名)	講義等の内容
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (麻生隆史)	情報技術を駆使して実際に利用されているソフトウェア・ハードウェアを調査し、プログラミング技術やハードウェアの開発プロセスを学び、それをどのような手法を用いて応用するかを指導する。特にソフトコンピューティングの基礎については詳細に説明する。同時に文献調査や英文論文読解も行う。また、情報科学の分野における論文作成手法を指導する。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (丑山優)	演習Ⅰおよび特別演習Ⅰにおいて各自設定した課題について、修士論文作成への具体的アプローチについての指導を行う。その際に基礎的および基本的文献の網羅・整理・内容の正確な把握を行う。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (小川雄平)	演習Ⅰ・特別演習Ⅰで設定・明確化した各自の個別研究課題を深く掘り下げ、先行研究を検証した上で、修士論文の完成を目指す。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (倉地和敏)	演習Ⅱ及び特別演習Ⅱでは、指導教員の指導を受けて修士論文の作成に取り組む。 具体的には、論点の整理の仕方、論理展開の進め方、先行研究の引用の仕方、文章の作成の仕方など、修士論文の作成に必要な事項について、一つ一つ指導を受けながら習熟した上で、修士論文の完成を目指す。研究結果を論文等にまとめる能力を向上し、充実した内容と整った形式を備えた論文の作成を目指す。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (車柄圀)	演習Ⅱでは、演習Ⅰに引き続き人間の色覚情報に基づいたデジタル画像処理に関する演習を行う。具体的には、画像の特徴抽出及び領域分割、色変換などの諸手法について MATLAB を用いて演習を行い、色覚バリアフリー社会の実現に向けた高汎用性の新しい手法の提案を試みる。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (津守常弘)	「演習Ⅰ」がマイクロ会計政策の決定者（経営者）の視点からのアプローチであるのに対し、「演習Ⅱ」では、会計情報の利用者の視点、ことに外部利用者の視点からの研究を行う。ここでは、経営分析の手法を用いて、投資決定上、ならびに経営管理上の意思決定と会計情報との関連について追究する。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (橋爪善光)	演習Ⅰに引き続いて実験、解析を繰り返すだけでなく、学会など様々な機会でも種多様なバックグラウンドの研究者とのディスカッションを行う。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (丹羽崇之)	演習Ⅱ・特別演習Ⅱでは、各人の研究課題をさらに深め、修士論文に結実させる。
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (荒平高章)	演習Ⅰ・特別演習Ⅰを受け、自身の研究内容について国内外での位置づけを明確にした上で、引き続き研究を継続し、実験データを整理し、考察を進める。得られた結果をもとに国内外の学会での発表や論文投稿を積極的に行う。

授業科目名 (担当者名)	講義等の内容
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (春日克則)	<p>演習Ⅱと特別演習Ⅱは、修士論文の作成(完成)を目的としている。</p> <p>具体的には、①自らの研究に係わる先行研究を過不足なく取り上げること、②仮説の提示、③論文の中核である仮説の検証・論証テスト、④結論、の各要素を意識しながら仕上げることである。なお、論文には、結論の新規性、分析の独自性、そして、インプリケーションが求められていることも念頭に置く必要がある。</p>
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (遠藤真紀)	<p>演習Ⅰおよび特別演習Ⅰで設定した各自の問題意識(仮説、視座等)を掘り下げるとともに、修士論文作成に必要な分析・検証手法を含めた研究方法等について指導する。文献・資料やフィールドワーク等を通して得られた情報を考察していき、修士論文の完成を目指す。</p>
演習Ⅱ 特別演習Ⅱ (宮崎裕士)	<p>演習Ⅱおよび特別演習Ⅱでは、指導教員の指導を受けながら修士論文の作成に取り組んでもらう。</p> <p>具体的には、修士論文の作成に必要な事項や留意すべき点について講義中に指導をし、また、論文を実際に作成しながらそれらを習熟してもらうことで、修士の学位に相応しいのみならず、社会一般に寄与するような研究を目指してもらいたい。</p>